

水期間中は堤防法面を裸地にしないことが必須であり、これらを基本として除草剤及び植調剤を使用する際の以下のポイントを押さえることが求められる。なお、除草剤及び植調剤を適用する河川の堤防除草費用を上回らないことも重要である。

- ①堤防植生管理の目標に応じた効果的な除草剤及び植調剤を使用すること。
- ②除草剤及び植調剤は、農薬登録されているものを使用すること。
- ③除草剤及び植調剤の散布は、家屋・農地等の沿川土地利用等に配慮し、系外へのドリフトを抑えること。

おわりに

河川堤防植生は、地域および河川毎に異なる様相を呈している。除草剤や植調剤を用いた堤防植生管理手法の導入にあたっては、河川の特長や堤防の植生を踏まえるとともに、沿川の土地利用、地域住民等への十分な配慮が必要である。今後の堤防植生管理によって堤防機能の向上だけではなく、心地よい緑地空間の創出や優れた景観の提供等、多方面からの地域貢献ができれば幸いである。

参考文献

- 国土交通省 2015. 河川砂防技術基準 維持管理編 (河川編). 31-32, 35-36
- 公益財団法人 河川財団 2016. 河川財団 NEWS NO.48. 4-11
- 山本嘉昭ら 2017. 堤防植生の課題に応じた新たな堤防管理のあり方の提案. 河川技術論文集 第23巻. 351-356
- 山本嘉昭ら 2018. 河川維持管理における堤防刈草の有効活用に関する一考察. 河川技術論文集 第24巻. 629-632

田畑の草種

畦菜・あぜ菜 (アゼナ)

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

アゼナ科アゼナ属の一年草。関東以西のやや湿り気のある畦や田にごく普通に生える。高さ10cmから15cm。葉は対生し、長さ1.5cmから3cm、幅5mmから1cm程度。6～7mmの淡紅紫色のかわいい花をつける。「畔菜」とはいうが、畦より本田に多い。筆者が学生の頃はゴマノハグサ科とされたがその後オオバコ科に移され、2009年のAPG IIIでアゼナ科として分類された。

日本在来種であるが、古人たちの目には「畦に生える菜」としてしか映らなかったようである。近世までの和歌や俳句に「あぜ菜」が詠われたものを見いだすことはできなかった。

近代に入って、北原白秋に「あぜ菜」を詠った歌があった。

つつまきひとりあるきのさみしさに

あぜ菜の香すら知りそめしかな (桐の花)

春の早朝、畦道を歩くと踏みつけられた「あぜ菜」の「香」

が鼻孔を打つ。「あぜ菜」にこんな香りがあったことを知らなかったという白秋の心象であろうか。春の早朝はすなわち「青春」。淡い壊れそうな透き通った青春の心象風景が広がる。

「あぜ菜」という名前からして食べられるのだろうか、食用として取り扱われることもない「ただの草」である。それが水田での雑草として人々の目につくようになってきたのは、水田で使われる除草剤の中のスルフォニルウレア系の成分に対して抵抗性を示すものが出現してきてからであった。抵抗性の出現で存在感を示したのも、アゼナにしてみれば想定内のことであったのかもしれないが、最近では、アメリカからの帰化種であるアメリカアゼナが幅を利かせているのも、織り込み済みのことであるのだろうか。

「畔菜」ではあるが畦より除草剤が撒かれた水田で見かけるほうが多い。今でも、白秋はあの透き通った歌を詠むだろうか。